

組織的な若手研究者等海外派遣プログラム報告書

氏名： 増田 和也	提出日：平成 23 年 4 月 4 日
東南アジア研究所における職名： *右記の該当する職位に○をつけて下さい。(講師・助教・助手・ <u>ポスドク</u> ・博士課程学生・修士課程学生・学部学生)	
派遣先の研究機関等(調査を実施した国名・機関名及びカウンターパート名)： インドネシア共和国・リアウ大学理学部・アフマッド＝ムハマッド (Afmad Muhammad) 氏 *派遣先の研究機関等の種類について右記の該当する箇所○をつけてください。 <u>大学</u> 研究機関・企業・その他)	
派遣期間： 平成 23 年 1 月 15 日 ~ 平成 23 年 3 月 22 日 (派遣日数： 67 日)	
研究活動等の主な内容(該当する番号に○をつけてください。複数可) <input checked="" type="checkbox"/> ①研究・実験 <input checked="" type="checkbox"/> ②フィールドワーク <input type="checkbox"/> ③セミナー <input type="checkbox"/> ④インターンシップ <input type="checkbox"/> ⑤サマースクール等の講習 <input type="checkbox"/> ⑥学会出席 <input type="checkbox"/> ⑦単位取得等 <input type="checkbox"/> ⑧その他	
研究活動の主な領域(該当する番号に1つ○をつけて下さい。) <input checked="" type="checkbox"/> ①人文学 <input type="checkbox"/> ②社会科学 <input type="checkbox"/> ③数物系科学 <input type="checkbox"/> ④化学 <input type="checkbox"/> ⑤工学 <input type="checkbox"/> ⑥生物学 <input type="checkbox"/> ⑦農学 <input type="checkbox"/> ⑧医歯薬学 <input type="checkbox"/> ⑨総合領域 <input type="checkbox"/> ⑩複合新領域	
派遣の概要(500~700字程度) <p>今日のインドネシアにおいてアブラヤシは主要な農産物のひとつであり、リアウ州は1980年代よりアブラヤシ栽培地が急激に拡大してきた地域である。1980年代から1990年代にかけてのアブラヤシ栽培は大農園が主導するかたちの大規模経営が中心であったが、1990年代後半以降は小農による栽培地が拡大し、これは村落社会の社会経済や土地利用に大きな変化をもたらしている。本研究の第一の目的は、このようなアブラヤシ栽培ブームがもたらした村落部の社会変化について、現地調査を通じて明らかにすることである。アブラヤシ栽培では農地整備・栽培管理・加工処理に多額の資本と技術が必要とするために、小農がアブラヤシ栽培を導入するにあたっては、政府、企業、商人、移民といった外部アクターと小農との間に多様で複雑な社会関係が生み出されている。本研究の第二の目的は、このような複数のアクターの間で創出されている社会関係を、相克や協調といった多面的な側面から検討することである。</p> <p>調査では、リアウ州東岸部の村落を対象とした。同地域は広大な熱帯性泥炭湿地で構成され、長らく開発から取り残されてきたが、1980年代後半以降、政府や大資本によりアブラヤシ大農園やアカシア造林地により急速に開発が進められてきた。そのうち、アブラヤシ栽培が浸透する以前に形成された村落を調査村として、1) 村落の成立と拡大の過程、2) それを支える生産活動・親族関係・社会関係、3) 村落と開発企業の間での交渉の過程、を動的に明らかにすることを目指した。</p>	
事業に係る研究成果(500~700字程度) <p>今回の派遣では、大半の期間を泥炭湿地帯に位置するブンカリス県ブキット・バトゥ郡の一村落で過ごし、合計60世帯を対象に、家族構成、生計活動、土地の利用・所有状況、村落の社会経済史などについて聞き取り調査をおこなった。そして、集落内の親族関係、開墾の歴史、土地利用の変化について詳細なデータを得ることができた。また、調査村滞在の前後には、諸官庁や図書館で統計資料や地域史に関する文献を得ることができた。今後は、今回得られた一次データを整理・集計するとともに、二次資料の内容とも照らし合わせながら分析を進め、学会・研究会での口頭発表や学会誌などへの論文投稿というかたちでの公表を目指す。</p> <p>その一方で、今回の調査では村落住民が中心となる調査対象となったために、政府や企業に対する調査ができなかった。また、新たな課題も浮かびあがった。一つは、当該村落が近隣の他村落の作り出し先として開墾されたという歴史的背景が明らかとなり、調査地の社会史を再構成するには、近接する他村落との関係性も含めて検討することが必要である点である。二つ目は、泥炭地開発に起因する地盤沈下が海水の内陸部への流入をもたらす、住民の生計活動と集落周辺の生物相に影響をもたらしている点である。今後は周辺地域の村落での調査や生物学や生態学といった分野の研究者との連携も視野に入れて、ひきつづき当該地域の総合的な理解を進めていきたい。</p>	